

ち  
ち  
ん  
ち

登場人物 女／涼子

男1／大学講師

男2／藤井さん

男3／ヤスオさん

男4／佐伯さん

男5／山田さん

男6／背広の人

どこかの大学の教授棟の一室。

段ボール箱などが置いてあり、講師の男が部屋の片づけをしている。

若い女がやって来てノックをした。

男1 どうぞ。

女 失礼します。

男1 ああ、君か。

女 先生、今よろしいですか？

男1 うん、もうすぐ授業始まるけど、どうしたの？

女 父からラインが来たんですね、あの父からラインが。話があるって。

男1 そう。

男1、コーヒーを注いでいる。

女 父がラインを使えるなんてびっくりして私、どの父が言ってるんだと思って。

男1 (笑って) お父さん幾つ？

女 幾つだろう、ちよつとわかんないです。

男1 まあ、うちの親でも使うくらいだからね。

女 なんで私のライン知ってるんだろう、お母さんかなあ。

男1 なに、嫌なの？

女 嫌です。

男1 嫌なんだ(笑)

女 嫌じゃないですけど、元気にしてるのは良かったなあと思って思いますが、

男1 久しぶりに娘と話したいんだよ。

女 きつとめんどくさい話だと思います。

男1、コーヒーカップを女の前に。

男1 はい、ミルクだけ。

女 だから、ちよつと実家に帰ろうと思ってて。

男1 うん、いいんじゃないの。

女 私、父の願いは出来るだけ叶えてあげたいと思ってるんです。

男1 親孝行して来なさいよ。

女 でも明後日なんですわね、試験。

男1 ああ、そうだね。

女 それまでに戻って来られないかもしれないわ。

男1 え、そんなに大変な状況なんですか？

女 大変っていうか、…え、大変な状況というのはどういう…？

男1 つまり、ご病気とかそういう…？

女 誰が？

男1 だからお父さん。

女 それは聞いてないです。

男1 じゃあ…？

女 どうなってるのか分からないんですけど帰ってみたい。ただひとつ言えることは、めんどくさいって事。

男1 …なら無理して帰らなくてもいいんじゃないの？

女 上京してから一度も帰ってないんです。そう、もうすぐ四年になるんで、きつとめんどくさい事になってると思います。

男1 なんだだろう、どういう事なんだろう…。

女 ウチの家庭、複雑なんですよ。

男1 電話じゃダメなの。

女 電話じゃダメです。

男1 どうして？

女 ややこしいもん。

男1 そうなんだ…。

女 父の願いは出来るだけ叶えてあげたいと思ってるんで。

男1 でも試験受けないと卒業できないんじゃない？

女 そうなんです。だからそこところは先生がなんとかしてくれたいと思うよ。

男1 …ん？…うんいや、なんとかって言われても、

女 だって先生不倫してるじゃないですか。

男1 …ん？…不倫？

女 はい。

男1 どういうこと？

女 どういうことって、奥さん居るのにそれを隠して付き合ってるじゃないですか私と。

男1 …。

女 じゃあひとつお願いしますね。

男1 いやちよつと待って、え、よくわからないんだけど…。

女 何がですか？

男1 だから、その…、  
 女 わからないですか？  
 男1 いや、分からないって言うか…、え、だつてさ、え、なんで知ってるの？いやなんで知ってるのって言うか、その、  
 女 私これから家に戻って荷造りをしようと思います。  
 男1 うん、あのさ、  
 女 実家まで七時間かかるんで。  
 男1 そんなに遠いの？！  
 女 だいたいそれくらい掛かりますね。  
 男1 どこだっけ？  
 女 名古屋です。  
 男1 ここ東京だけど…、  
 女 厳密に言うと名古屋の隣の街なんです。  
 男1 それにしても、  
 女 でもあんまり名古屋括りにされると嫌な気分になる人居るんで気を付けて。  
 男1 なんにも言っていないんだけど、  
 女 ウチは名古屋からさらに一時間もかかるんで。  
 男1 そうなんだ、  
 女 でももうめんどくさいから名古屋って事にしてるだけなんだ。  
 男1 でも名古屋なら新幹線で、  
 女 あ、バスです。  
 男1 あ、バス？  
 女 お金無いんで。  
 男1 いや、そんなの出しますよ。  
 女 え？  
 男1 だつて急いでるんですよ？出しますよ。  
 女 そんな、不倫してる人にそんな、  
 男1 うん、ちよつと説明させてくれないかな、  
 女 人の道から外れる事、特に配偶者ではない者との男女関係の事ですよ？  
 男1 不倫の説明じゃなくてさ、一旦座ろう、落ち着いて話をしましょう。  
 女 私、これから実家に帰つてきつとめんどくさい話をすると思うんですね、その前にまためんどうさい話が始まるんですか？  
 男1 あ、ね、妻とは最近会つても居なくてですね、だから別に隠してた訳じゃなくて、なんていうか、だから、もう居ないんじゃないかと思つて、つまりもう居ないのと同じような感覚になつて、だから結果的に隠してたみたいなき感じになつちやつたけど、本当は隠してたつもりはなくてその、  
 女 (手を挙げて) そうだ、私は荷造りするので、ついでに先生の荷物もまとめて貰えると助かります。

男1 いやだからね、もう別れるんですよ妻とは、もう別れるつもりで生きてますからこっちはだから別れるのと同じなんです、会つてないんで、もう本当にそういう感じなんです本当に。  
 女 あ、ね先生、私は別に怒つてるとか、そういう事じゃなくて、ただ試験を受けなくても受けたい事にして欲しいと言つてるんです。

男1 うん、それが一番難しいんだよ、僕はただの非常勤講師だから。  
 女 でも先生は不倫してるんですよ、生徒と。それって大丈夫なんですか？  
 男1 なんとか！明後日までに戻つて来れないかなあ？  
 女 それは難しいと思うんですけどよね経験上。  
 男1 でもさ、  
 女 ウチの家庭、複雑なんで、  
 男1 じゃあ僕も一緒にいきます。  
 女 え？  
 男1 出来るだけ早く行つて早く帰つて来ましょう。  
 女 先生まで行つたら余計にめんどくさいことになると思うんですけど、  
 男1 今からタクシー呼びますから、そこからは新幹線で(受話器を取る)  
 女 : なんかすみません、不倫してる方にそんな、  
 男1 それやめて、  
 女 これからきつとたくさんお金が必要になるでしょうに慰謝料とか。  
 男1 すみません、今日の授業休講にします。すみません突然、あとタクシー呼んでください。

男1、電話を切つたため息を吐いた。

女 父は昔、タクシー運転手、やつてたと思うんですよ。でもあれだな、記憶がぼんやりしてるから違つかもしれない。小学生の時なんで。母は仕事熱心な人で、朝から晩まで働いてました。代わりに父が家の事やったりして、だから私、父と過ごす時間の方が長かつたんです。特に何を話したとか、どこかに連れてつてもらつたとか、そういう思い出は無いんですけど。父はたまに仕事に行くけどすぐに帰つて来ました。帰つて来てお酒飲んです。お酒飲んで寝てました。そのうち朝からお酒を飲むようになったんでお母さんによく叱られてました。タクシーの運転手がお酒を飲むという事は、仕事に行かないと言言しているようなものでもね。でも別に酒癖が悪いとかそういう訳でもなくて、いつも大人しく酔いつぶれてたんで迷惑とか感じた事はなかつたんです。いつも部屋の間で申し訳なきように寝てました、丸くなつて、猫みたいでしょ。  
 男1 はい…。  
 女 起きてる間はお酒を飲んだかなんか昔の古いゲームをやつてるか泣いてるか。なんで泣いてるのか聞いてみただけで自分でも理由は分からないらしいので気にするのをやめました。母は夜遅く帰つて来ては父を叩き起して説教して、たまに家から追い出します。だから夜中にくつそり鍵を開けておいてあげるのが私の仕事。朝になると知らないうちにいつもの場所て丸くなつて寝てる父を見て母は「猫じゃないんだから」ってつぶやいた。でも私、そんな

父でも嫌いじゃなかったんですよ。働かないけど正直な人だったから。私の前で嘘はつかない。なんで仕事行かないのか聞いても「眠いから」「行きたくないから」「飲みたいから」って、全部正直に言いました。ある日、救急車で運ばれた父はあくる日帰って来て、「父ちゃん、そろそろ死ぬわ」と言って三日後に死にました。

男1 ……え？

女 母は「あーあ、だまされたわ」って言ってました、赤く腫らした目を抑えて。

男1 お父さん、亡くなってるの…？

女 それからしばらくして、母が知らないおじさんを連れて来たんです。

男2、やってくる、

男2 こんにちは。

女 今日から「新しいお父さんよ」って、

男1 うん…。

男2にもコーヒーを入れる男1。

男2 りようちゃんて、呼べばいいかな？ 僕の事は呼びやすいように呼んでくれていいから。

女 新しいお父さんも真面目そうな人でした。毎日決まった時間に出て行って、決まった時間に帰ってくる。母は相変わらず忙しそうで、父より早く家を出て、父より遅く帰って来ました。そのうち父は働かなくなりました。

男1 ……なんで？

女 ほとんど家から出なくなってお酒を飲んでる姿は前のお父さんそっくりでした。私も学校行つてなかったから、家ではなんだかよく知らないお父さんと二人きりだったんですよ。

男1 ……君も学校行つてなかったの？

女 はい。私学校行つてなかったです。

男1 ……なんで？

女 わかんないです。

男1 いや、わかんないことないでしょ…？

男2 りようちゃん、勉強、教えてあげようか。

女 たまにお父さん、こうやって話し掛けてくるんです。めっちゃ気遣ってるなあと思ったから「あ、うん…」

男2 お父さんね、先生なんだよ、だから、教えるの上手いよ。

女 あとあと聞いたら体操教室の先生だったんですけど、

男2 あ、算数、懐かしいなあ、計算ドリルね。この「ドリル」ってどういう意味なんだろうね。穴開けるのかな、頭に、ぐりぐりって頭に穴開けて知識を埋め込むって意味だったら怖いね。

女 ……

男2 そんな訳ないか。

女 何言ってるんだらうこの人って思いながら「あ、うん…」って私も気を遣って教えて貰って、

でも答え合わせすると全部違うんです。

男2 ああ、あれ？ なんか、お父さんが子供の頃と、変わっちゃってるなあ、答えか。

女 私もう六年生になってたから大人のこと天体わかって来て、「お父さん、仕事行かないの？」

男2 ああ、うん、あのね、明日からなんだ、仕事。

女 「昨日もそう言ってお母さんに怒られてた」

男2 あ、そうだっけ、忘れちゃった。お母さんなんか言ってた？

女 なんにも。

男2 そう…。

女 前のお父さんにそっくりだったから私、「お父さん、もうお酒飲まない方がいいよ」

男2 ああ…、そうだな、うん、わかった、もう飲まない。

女 そう言つて五分後には酔いつぶれて、いつもみたいに部屋の隅で申し訳なきそうに丸くなって猫みたい。前のお父さんは嘘付かなかったけどこのお父さんは嘘ばかり。でも私、この父も全嫉嫌じゃなくて、嘘ばかりだけどそれが嘘だつてわかるから「繕だなと思つて。この頃になるとお母さん、もうお酒を飲む行為自体が嫌いになつて、お酒止めないと離婚するって言い出して」

男2 わかりました、もう二度と飲まないです。

女 でもお父さん嘘ばかりだから、

男2 えー、そういう訳で、お父さんね、お母さんとお別れする事になりました。短い間でしたけど、えー、お父さんは良いお父さんではなかったと思いますが、どうか、身体に気をつけて。なんか、りようちゃんと一緒に居た時間の方が長かったなあ。じゃあ勉強頑張つて。じゃあ。

女 これも嘘だろうなあつて思つて、どうするんだらうなあつて思つて、そのまま何か月か経つたある日、

男3、やってくる。

男3 こんにちは。

女 お母さんがまた知らないおじさんを連れて来て「新しいお父さんよ」って。

男3 りようちゃんて、呼べばいいかな。

女 お母さんはまた仕事に出かけて行きます。

男3 僕の事は呼びやすいように呼んでくれていいんだけどあなたいつまで居るんですか？

男2 あ、はい…、

男2、立つ。

男3 ルリ子から、聞いてませんか？

男2 あ、あのお、はい、聞いてます…。

女 ルリ子って言うのはお母さんの事です。

男1 ああ、うん(男3にもコーヒーを入れる)。  
 男3 今日から私もここに住むことになりました。  
 男2 ああ、はい…。  
 男3 ええ。  
 男2 あ、はい、あのお、すぐに、そのお…。  
 男3 いやわかりますよ、なかなかね、その歳になって仕事見つけるのも大変ですよね。  
 男2 …ホントそうなんです。  
 男3 でも選ばなければあるからさ。  
 男2 はい…。  
 男3 じゃあわかりました、一週間あげますから、その間に仕事と住む場所探してくださいよ。  
 男2 一週間…。  
 男3 充分でしょ？  
 男2 いや、一週間もありがとうございます！頑張ります！  
 女 この返事は絶対出て行かない返事だから、  
 男3 藤井さん。  
 男2 …。  
 男3 藤井さん？  
 男2 あ、私？はい。  
 女 あつという間に一週間が経ちました。  
 男2 あ、あ、もう…うあ、えつと、そつですよね、えつと、  
 男3 探してました？  
 男2 ええ、あのお、そつ、昨日もちょうど、その…ね、りようちゃん、ね？  
 男3 うちの娘に話し掛けなくて貰えますか？  
 男2 すみません…でも元は…。  
 男3 は？  
 男2 ですよ、すみません…。  
 男3 あのね藤井さん、よく考えてみて、私まだ新婚なんですよ。新婚夫婦の家になんて前の夫  
 男2 が居るんですか？おかしくないですか？  
 男2 はい…。  
 男3 可哀想だなあとと思ってるんですよ、だって藤井さん、もう五十でしょ？  
 男2 あ、四十九です…。  
 男3 五十みたいなもんでしょ、なんでその一歳を大切にするんだよ。  
 男2 ですね、もう五十ですね。  
 男3 その歳になつてさ、独り身になつて、それは寂しいと思えますよ。でもさ、こつちもちよ  
 男2 つと、限界だなあ。どうして私が、前の夫の面倒みないといけないんですか？  
 男2 それは、はい、わかっております…。重々承知しております。  
 男3 じゃあどうするんですか？  
 男2 はい…。  
 男3 具体的に、どうしますか？

男2 えつと、  
 男3 探してあげましょうか？  
 男2 な、何を？！  
 男3 仕事ですよ。  
 男2 なんだ…。  
 男3 「なんだ」って何？  
 男2 なんでもないです、  
 男3 あ、奥さんでこと？な訳ないでしょう。  
 男2 すみません…。  
 男3 仕事ですよ、僕が探してあげますから、それやってくださいよ。  
 男2 いやそんな、ヤスオさんにそんな、そこまでやってもらうのは、  
 男3 あなた探す気ないから探してあげますよ。  
 男2 やめてください、涼子の前でそんな、怖い事言わないでください…。  
 男3 怖い事？  
 男2 まるる漁船とか臓器提供とか、そういうのは私、  
 男3 なんだと思ってるんですか私を。ネジ工場はどうですか？ネジが作られるのをただ見る  
 男2 だけの仕事があるんです。  
 男2 ああ、へえ、ネジ？  
 男3 僕の知り合いが派遣会社に勤めてて、人を探してるんです。  
 男2 ああ、はいはい…。  
 男3 ネジを見るだけでいいそうですよ。  
 男2 へえ、ネジを見るだけ？  
 男3 たまに変な形のネジが出てくるんで、それを見つければいい簡単な仕事です。  
 男2 あ、そんな仕事があるんですか？  
 男3 住み込みも出来るそうです。  
 男2 あ、住み込みも、それはいいなあ。  
 男3 じゃあそこで。  
 男2 いや、えつと、でも住み込みまでしてネジを見るんですよ…？うーん、住み込んでネジ  
 男3 を見るの人生か…？うーん、どうだろ？うな…。  
 男3 あなた自分の立場分かってます？  
 男2 いや、そういう簡単な仕事には必ず裏があるって聞いた事があつて、  
 男3 ずつと機械音が鳴ってるからうるさいそうですよ。  
 男2 やはりそういう…、  
 男3 耳栓してればいいじゃないですか。  
 男2 耳がねえ私、生まれつき弱くて、あの、こしよばくて、耳栓が、  
 男3 藤井さん、イヤカゲンにしないさいよ。  
 男2 あれ、なんかやれそうです。やれそうな気持になつて来ました！それならなんか、やれそ  
 男3 うな気がして来ました！  
 男3 じゃあそうしましょう。

男2 はい、やります！  
男1 じゃあこれも…？  
女 はい、やらないです。  
男3 藤井さん…。  
男2 はい…。  
男3 面接行かなかったそうですね。  
男2 …。  
男3 なんて行かなかったんですか？  
男2 …あ、行きました。  
男3 は？  
男2 行きましたけど…。  
男3 …。  
男2 おかしいなあ、行っただけでね…。え、行っただけでね…。あれ、行ってないのかな…。じゃあどこ行っただけですかね私？  
男3 りょうちゃんこの人、昼間どこかに出かけてた？  
男2 出たよね、お父さん出たよね？  
男3 お父さんじゃないでしょ。  
男2 お父さんじゃないけど出たよね？  
女 あ、うんと…。  
男3 いいんだよ、もうお父さんじゃないんだから気を遣わなくて。  
男2 お父さんじゃないけど今まで一緒に居た人には優しくした方がいいと思うよ。  
男3 この子は正直な子なんです。そうやって嘘を強要するのやめて貰えますか？ここに酒瓶がある時点で分かっているんですよ。  
男2が酒瓶を隠そうとするのを先に奪う男3。  
男3 とうか、え、あなたお酒飲むお金どうしてるんですか？  
男2 あ、いや…。  
男3 無かったら買えないでしょ。  
男2 おかしいなあ、どうしてお酒があるんだろうか…。  
男3 え、りょうちゃん？  
女 あ、うん。  
男3 …なんで？  
女 わかんない。  
男3 それはダメだよ、それはダメだ、この人の為にならないよ？  
女 はい。  
男2 涼子を責めないでください、涼子は何も悪くないんです。  
男3 当たり前ですよ。なんでこの子が悪いんですか。ねえホントお願いだからさ、ひとの娘を呼び捨てにするのやめて。

男2 すみません…。  
女 でも、  
男3 …ん？なに？  
女 お父さんみたいだから。  
男3 …お父さんみたい？  
女 うん。  
男3 どういう意味？  
女 わかんない。  
男3 お父さんみたい…？  
男2 お父さんだよ。  
男3 うるさいよ。  
男2 すみません。  
男3 …え、なんでりょうちゃんは、そういうお金を持つてるの？  
男2 あ、あのお、ルリ子から生活費を貰ってるそう？  
男3 え？  
男2 ルリ子がなかなか家のことやれないから、今は涼子がほとんどやってくれてるんです。  
男3 ああ、そういうこと…。  
男2 でもあの、私があるから何か貰ってるとか、そういう事はけして、  
男3 お酒買って来て貰ってるんですよ。お昼も一緒に食べてるんですよ。  
男2 残り物ですよ、私なんて、  
男3 りょうちゃん、もうダメだよ。君のお小遣いは、自分の為だけに使うの。どうせ餓うなら、こんなお父さんじゃなくて、猫にしろさい。わかった？  
男2 あ、でもルリ子は猫アレルギーで、  
男3 また呼び捨て、ひとの娘、ひとの妻を。…ねえ藤井さん、真剣に考えようよ。そういう風だからルリ子に愛想尽かされたんじゃないの？あなたすべてが万事なるようになると思ってるでしょ。だから、そんな風になっちゃうんだよ。世界はあなたを中心に回ってるんじゃないんだよ。  
男2 はい…。  
男3 僕だつてね、涼子の前でこんな事言いたくないんですよ。  
男1 これは、目の前でこういう話してるの…？  
女 おじさんがおじさんにめっちゃ怒られてました。  
男3 お願いだからさ、真剣に考えてくださいよ。まだなんとかなりますから。ここで人生諦めてどうするんですか？やる気出してくださいよ、お願いします！  
男2 (神妙になつて)…ヤスオさん、頭を上げてください。  
男3 お願いします、仕事見つけてください。  
男2 …わかりました。私、行って来ますから、明日、もう一度、面接  
男3 本当ですか？  
男2 はい、私、人生、やり直します。  
男3 …ありがどう、ありがどうございます。

男2 こちらこそ、ありがとうございます。こんなに自分の為に怒ってくれた人、初めて会いました。ありがとうございます。

男3 いえ、偉そうにすみません。

男2 頭をお上げください。

男3 上げます。

男2 上げましたか。

男3 ……なんで僕が謝ってるみたいなきに感じるんですか、

男2 すみません…。

女 そして次の日、

男3 藤井さん…、

一人、立ち上がる。

女 出て行かないし面接も行きませんでした(嬉しそう)。

男1 なにこの人…。

男2 いや、あのお、

男3 昨日あんなに反省してたのに？なんで？

男2 いや、行っただけですよ、行っただけです。

男3 行っただけですよ…。

男2 行っただけですよ、ほんとに、あの、ビルの前で、行っただけだと思っただけです、

男3 藤井さん、

男2 行っただけですよ、靴履いて、そしたら、ああ、そっか、この前すっぽかしたから、きつとすこい怒られるだろうなあと思って…、玄関の戸を開けて、閉めました。

男3 ……

男2 明日こそ、明日こそは私、行ってみますから、行ってみようと思ってみますから、…すみません。

男3 ……もういいです。

男3、ため息を付いて頭を抱え、椅子に座る。

男2 ヤスオさん…？

男3 ……

男2 どうしたんですかヤスオさん…？ヤスオさん…？

男3 これからどうするんですか…？

男2 これから…、これからは…、

男3 私だってね、いつまでも仕事がある訳じゃないんですよ…。どうしたらいいんですかね、これから…。

男2 ヤスオさん…？

男3 お酒、ありますか…？

男2 あります。

男3 あるんかい…。

男2 無いです…。

男3 もお、りようちゃん…、

女 ごめんなさい。

男2 ほんとに無いです。でもなぜかあるんです。無いのに。いやあるけど無いのかもしれない。

男3 じゃあください…。

男2 え？

男3 僕にも…。

男2 ……はい！

二人、酒を注いで飲む。

女 これ以降、このお父さんも家から出なくなりました(嬉しそう)。

男1 ……どういふこと？

女 わかんないです。このお父さん、なんの仕事してたのかわからないけど、働かなくなりました。

男1 え、そんな…、

女 人生何が起こるかわかりませんね。

男1 ……これなんの話だったの？

女 ウチの家庭が複雑なので、帰るとなかなか戻って来れないんじゃないかという説明です。

男1 ああ、そっか、これは確かに複雑だ…。

男4、やって来る。

男4 こんにちは。

女 新しい父です。

男1 この人も働かなくなるんですか？

女 うん、ちよつと聞いてて。

男1 ……(男4にコーヒを)。

女 私は中学二年生になっていて、この父とこの父は相変わらず家に居て、昼間からお酒を飲んで最初の父が残していった古いゲームをやっていました。

男1 出て行かないんだ…。

女 この頃になると、母はほとんど家に帰らなくなっていて、私達は交代で飯を作ったり、たまに散歩に出たり、それなりに楽しい毎日を過ごしていたように思います、あんまり覚えてないけど。

男4 りようちゃんて、呼べばいいかな？

女 あ、なんでもいいです。

男4 僕の事も、呼びやすいように呼んでくれていいから。  
女 はい。

男4 今まで大変だったね。辛かったでしょう。もう大丈夫だからね。

男4、男2と男3の向いに座る。

女はポテトチップスでも食べている。

男4 さて、話は聞いてます。どちらが、どっちですか？

男3 あ、あの、

と、男3は立って戻る。

男3 私が、はい…

男4 ルリ子から聞いてますよね？

男3 聞いてます…

男4 じゃあ、どっして居るんですか？

男3 はい、えつと…

男2 どういうこと…、どういうことヤス君？

男3 あ、うん…

男4 あなたが、前の前の夫ですか。

男2 誰なんですかあなた、なんですか、勝手に人んちに入らないでください…。ヤス君、この人誰…

男3 離婚したんだ…

男2 え…

男3 あのお、すみません、早急に、仕事を探しますので、その…

男4 住むところですよ。

男3 そうですね、はい…

男4 これは別に急な話ではないですよ？半年前から通達はしてはいます。何やってたんですか？

男3 …藤井さん、行こう（男2に手を出す）。

男2 でも…

男3 だってもうしょうがないじゃないか、新しい主人がやって来た、僕等はここには居られない…

男2 どうするの、行く当てあるのかい？

男3 無いよ、無いけど…

男2 あのお、一週間だけ、猶予を頂けませんか？その間に仕事と住む場所を探して来ますので、一週間だけお願いします。

男4 ダメです。

男2 そんな…

男4 あなた方が一週間でどうしよう出来るとは思えない。  
男2 ヤス君は一週間くれましたよ、なんだあなた、鬼だな。偉そうにふんぞり返ってき、私らだってね、何もやって来なかった訳じゃない、散々努力して、それでも見つからないから、こんなことになってるだけなんだ。

男1 努力なんてしてないでしょ？

男2 私らだって好きでここに居るんじゃないんだよ。

男1 え、好きで居るんでしょ？

男4 聞いてますよ、あなた達は結婚後、働いていたのはたったの1か月ですよね。それから…

男3 仕事は探そうとはしたんです、でもなかなか見つからなくて…

男4 そんなことはないでしょ。

男3 そんなことはないです。

男4 ちゃんと探してないだけです。

男3 探してないです。

男4 選ばなければありますよ。

男3 選ばなければはい。

男4 でしょ、

男3 聞いてますか？あなたですよ？

男2 あ、私、はい…

男4 あんた一番ヤバいなあ。他人の家に、勝手に居座ってき、非常識だと思わないんですか？

男3 すみません、言っておきます…

男4 私の知り合いで、ネジ工場やってる人が居るんですが。

男3 あ、

男2 懐かしい…

男3 ね…

男4 知ってるんだったらちようどいい。そこがいいんじゃないですかね、住み込みで、とても楽な仕事だと聞いてますよ。

男1 このネジ工場、よほど人手不足なの？

女 ちよつと先生、黙ってて。

男3 ああ、ネジ工場、えつと、そうですよね、うーん、

男4 何か不満でも？

男3 いや、この人耳が、ね？

男2 はい、耳が…

男3 耳栓すると、

男2 こぼれて、

男3 ええ…

男4 自分の立場分かってます？

男3 わかっていますすみません！  
 男4 どうこう言える立場じゃないでしょう。  
 男3 すみません！  
 男4 ていうかき、あんたらいつまで一緒に居る気なの？バラバラの仕事したらいいでしょうが。  
 男3 あ、そうか、確かに、  
 男2 ああ、はい…  
 男4 お二人はもう一緒に居たらダメだと思いますよ。それぞれやりたい仕事を探してくださいよ。  
 男3 やりたい仕事なんて、ねえ？  
 男2 三日でいいんで、お時間いただけませんか？  
 男4 ダメです、今すぐ荷物をまとめて出て行ってください。  
 男3 はい…  
 男2 鬼だなあ。あんた鬼だよ。この人は今晚寝る場所も無いんですよ。  
 男4 あなたもですよ。  
 男2 私ですよ。  
 男4 これはあなた達の為なんです。ここに居ては、お互いの傷をなめ合っただけで動かない。娘から酒代をせびつては肩間から酒を飲み、酔っていけば知らないうちに一日が過ぎて行くそんな事でいいんですか？  
 男3 あ、せびつたりはしてないんですよ…  
 男2 なぜかあるんです、無いのに…  
 男4 そんな訳ないでしょう。そんな魔法みたいな…  
 女 でも…  
 男4 え…え、りょうちゃん…？  
 女 …お父さんみだから。  
 男4 …お父さんみたい？  
 女 お酒飲んでると、なんか、  
 男2・男3 お父さんだよ。  
 男4 うるさいよ。  
 二人 すみません。  
 男4 りょうちゃんのお小遣いを減らすようにルリ子に言います。ここに居ても、誰もお酒を買ってくれる人は居ません。(女に) いいね。  
 女 はい。  
 男2 鬼だ、鬼が居た…。  
 男3 行こう…。  
 男2 ヤス君…！  
 男4 封筒を机に出す。  
 男4 これ、差し上げますよ。

男3 これは…？  
 男2 (中を見て) え、こんなに…？！  
 男4 それだけあればひと月は大丈夫でしょう。  
 男3 あ、ありがとうございます…！  
 男2 鬼なんて言ってますみませんでした。  
 男4 まだ、四十代でしょ？  
 男2 はい。  
 男3 この人は五十代です。  
 男2 はい。  
 男4 五十代か。でも諦めたらダメだよ。まだまだなんとでもなりますから。頑張ってくださいよ。  
 二人 はい！  
 男4 良い返事だ。応援してます。お体に気をつけて。  
 男3 ありがとうございます！  
 男2 ありがとう(静かに頭を下げる)。  
 男4 さようなら。  
 男4 立ち上がり、玄関へ促す。  
 男3 あの、最後に娘に一言だけ、いいですか？  
 男4 …どうぞ。  
 男3 りょうちゃん、短い時間だったけど、お世話になりました。僕は良いお父さんではなかったと思うけど、えっと、  
 男2 どうか、身体に気をつけて、  
 男3 どうか、身体に気をつけて、  
 男2 勉強頑張ってください。  
 男3 …なに、ちよつと、なに？  
 男2 いや、昔そうやって言ったなあって思い出して、  
 男3 は？  
 男2 いや、僕が、  
 男3 ああ、藤井さんが離婚した時のこと？  
 男2 あ、うん…。  
 男3 なにそれ、僕は僕の言葉で言わせてよ。  
 男2 うん、ごめん…。  
 男3 あのお…、えっと、そうだなあ、うんと、えー、うーんと、  
 男4 早くして貰っていいですか？  
 男3 あ、はい、えっと…もお、藤井さんが言った言葉がチラついちゃうじゃないかよ…、  
 男4 別に被ってもいいんじゃないですか？  
 男2 いいよ、被っても。

男3 そういう訳には、  
 女 被つてもいいよ(どうせこの二人は出て行かないと思ってる)。  
 男3 …、(男2に) 同じでもいい？  
 男2 うん、いいよ、もういいよ。  
 女 うん、覚えてないし。  
 男3 じゃああの、…いやあやつぱり…、僕は僕で、あると思うんですよ、だからその…、  
 男4 早くして貰っていいですか？  
 男3 あ、はい、あのお、りようちゃん、短い時間だったけど、えー、僕は良いお父さんではな  
 かったと思います。えー、身体に気をつけて勉強頑張ってください。  
 男2 結局一緒じゃん…。  
 男3 これしか浮かばなくなっちゃったんだもん…、  
 男4 じゃあこれで。  
 男2 私からも一言いいですか？  
 男4 あなたはダメですよ。だいぶ前に言ったんでしょ？  
 男2 ええ、でも、あれからいろいろありまして、  
 男4 この人は直前の父親だからヨシとしたけど、あなたはもう関係ない人なんですからダメで  
 すよ。  
 男2 全疎関係ないって事は、ねえ？  
 男3 藤井さんからも言わせてあげてくださいお願いします。これでも元父親なんです。  
 男4 あのさ、そんな事言いついたらさ、いつまでも親の顔されても困るんで。  
 男3 いや、でもあの、親の顔なんか、元々してなかったんですけど、ね？  
 男2 ああ、そうなんです、全然そんな顔は、  
 男3 だつてどんなにか想像も付かないですもん親の顔って。  
 男2 そうなんです。  
 男4 うんだからダメなんじゃないですか？親なら親らしく、親の顔しないと。  
 男3 ああ、それってどうしたら…、  
 男4 彼女を立派に育てたらなれたんじゃないですかね、そういう顔に。  
 男3 なるほど、はい…。  
 男2 でも結構立派に育つたと思っただけね、  
 男3 あ、そうだよ。あの、結構立派に育つたと思います。ね、涼子、ね？結構立派に育つた  
 よね？  
 女 自分ではよくわからないけど、  
 男4 何を本人に聞いてるんですか。あのさ、人の娘を呼び捨てにするのやめて貰っていいです  
 か？  
 男2 あ、それ…。(男3を指さす)。  
 男3 なに、ちよつとやめてよなに…。  
 男2 いや…。(ニヤつく)。  
 男3 あ、この人今、ざまあみろつて思ってるんですよ。  
 男2 いや思ってるない思ってるない。

男3 思ってるじゃん、えー、絶対思ってるじゃん。  
 男2 いやあだつて、  
 男3 なによ、え、なによ？  
 男2 偉そうに言ってたなあつて、ねえ？  
 男3 今それ言う？  
 男2 いやだつてさ、  
 男4 おい、おいじゃれ合うな、何をじゃれ合ってるんだよ人んちで。  
 男2・3 …すみません。  
 男4 子供は親の背中を見て育つて言うでしょ。あんたらみたいな人が親だとね、悪影響なん  
 ですようちの娘に…すみませんね、年上に向かつて。  
 男2と男3、居なくなる。

男1 帰つてた…。  
 女 この父はこれまでの父とは違つて頭が良くてお金持ちです。なんの仕事をしているかわかり  
 ませんが、ほとんど家に居ました。パソコン相手に何時間も、物静かで優しいところはこれ  
 までの父と同じ。おかげで私は何不自由なく暮らしてたけど、なんとなく寂しかった記憶は  
 ありますね。いつも丸くなった場所が父達が居ない。家が広く感じました。  
 男1 ……つさり僕は、あのお父さん達、貰ったお金が無くなったら戻つて来ると思つたけど、  
 女 私もそう思つてたんです、でも帰つて来ませんでした。私が高校生になるまでは。  
 男1 え？

男2と男3、戻つて来る。

男3 やあ、りようちゃん。  
 男2 久しぶり。  
 女 私は高校一年生。学校から帰つて来ると、お父さん二人が家の前でモジモジしてて、  
 男3 りようちゃん、高校生になったんだねえ、大きくなつて。  
 男1 いつから学校行けるようになったの？  
 女 私、学校行けなかつた訳じゃないです。行つてなかつただけで。気が向いたらまたに行くん  
 です。でも高校生になるとさすがにそういう訳にも行かなくて、卒業できるギリギリの日数  
 だけ行つてました。  
 男3 あのさあ、お父さん、居る？  
 女 あ、居ると思う、おとうさーん(嬉しそうに呼びかける)。  
 男3 あ、いや、…どうする？どうしようか？  
 男2 どんな感じ？やっぱ仕事無くなつちやつたかな？  
 女 え？  
 男3 りようちゃんに聞いたつてわかんないよ、失礼な事言っんじゃないよ。  
 男2 だつて皆こゝ来ると仕事無くなるから、

男3 コラ。ハハ、ごめんねえ。お母さん、最近どうしてるの？帰って来てる？  
 女 ああ、帰って来てるみたいだけど、会えてないから、  
 男3 ああ、じゃあまだダメだ。  
 男2 なんだよ、話が違っじゃないかよ…。  
 男3 そろそろだと思っただけだよ。  
 女 とりあえず、中入る？  
 男3 ああ、じゃあちよつと、ご挨拶だけ…。  
 女 さすがに先生、気づかないですよ。  
 男1 何を？  
 女 二人目のお父さん、私が小学四年生の時に来たんです。  
 男1 うん。  
 女 三人目が小六、四人目が中一。わかります？二年ごとなんです。  
 男1 うん。  
 女 だから帰って来たんです、この人達。  
 男1 …ん？  
 男3 お久しぶりです…。すみません突然…。あのお、覚えておりますでしょうか…、あのお、  
 三番目です。  
 男4 …ああ。  
 男2 あ、どうも、二番目です。  
 男4 はい…。どうされました？  
 男3 いや、ちよつとね、あのお、ね？  
 男2 あ、うん…。  
 男3 偶然、通りかかったもんだから、ええ。  
 男4 偶然通り掛かるようなところじゃないと思えますけど…。  
 男3 ああ、ハハ、もお、相変わらずだなあ。  
 男2 ハハハ。  
 男4 …えつと？  
 男3 いや、そのお、どっだろうなあと思って、  
 男4 …。  
 男3 そのお…、  
 女 なんかに飲む？  
 男3 あ、ああ、そっだね、うん、なんか…、  
 男2 いやあ、それにしても源子、大きくなったねえ、ははは。  
 男4 …（見る）。  
 男2 …（畏まる）。  
 男3 やつぱり落ち着くんだよなあ、なんだろうねえこの感じ。  
 男2 帰って来たなあつて感じがしますよね、不思議ですよ。  
 男3 この落ち着いた色の壁紙に落ち着いた色のフローリングね、  
 男2 そうそう。

男3 落ち着いた天井の高さに落ち着いたダイニングテーブルね、  
 男2 そう。  
 男3 結果「落ち着くね」って言うね、  
 男2 そう。  
 男3 そしてコレね、このなんか変な置物ね、  
 男2 そうそうコレ、私の頃からあるんですよ？誰が買ったんですかねえ、  
 男3 藤井さんが知らないってことは最初のお父さんじゃないかって言うね？  
 男2 ねえコレ、わかります？なんでしようねコレ？  
 男3 なんかの動物じゃないかってね、話してましたもんね？  
 男2 そうそう。鳥ですよコレ。  
 男3 これが一番「落ち着かないよね」って、ね？  
 男2 そう、フクロウなんじゃないかって言うね、  
 男3 だからこれが怪しいんじゃないかって話にはなってるんですよ僕等の中で。なんだと思っ  
 ます？  
 男4 …りようちゃん、ちよつと。え、なんの用？  
 女 わかんない。  
 男4 なんで入れたの？  
 女 外に居たから。  
 男4 変な人連れて来たらダメだよ。  
 男3 ちよつと、変な人つてもお…、一緒に、暮らしてましたから、ねえ、二年もねえ？  
 男2 私なんて四年ですよ。まだこんなちよつとやかったからねえりようちゃんね。  
 男3 そんなちよつとやくないですよ。  
 男2 いやいやこんなちよつとやかったから。ね？よく近所の駄菓子屋行ったもんね、なんか、変  
 な色のついたゼリーみたいなのか変なお菓子買ってあげたもんねえ  
 男4 今日は、どういう…？  
 男3 あ、いや、その…、元気ならいいんですよ…、その、元気かなあつて、そろそろ…、その、  
 そろそろかなあつて、ね？  
 男2 ああ、ええ。  
 男4 …。  
 男3 まあ、心配にはなつて、いやわかりますよ、私らに心配されたらたまったもんじゃない  
 つて話かもしれないけど、ね？  
 男2 あ、ええ…。  
 男4 お二人に心配されたら終わりですね…。  
 男3 ですよ…、そりやですよ…。  
 男4 …。  
 男3 あ、じゃああのお邪魔しました…、りようちゃんも、また。  
 女 もう帰っちゃおう？  
 男3 お母さんにもよろしくお伝えくださいな。あ、伝えない方がいいか。  
 男2 あ、うん、伝えない方が、うん。

男3 じゃあその辺は、まあ伝えなくてもらって…。じゃあ、その…

男4 今は何をしてるんですか？

男3 あ、仕事ですよ。えっと、日雇いの、なんか交通整理とか、そういうのをたまに、たまに？

男3 ええ、頻繁に仕事がある訳ではなくて、その、ね？

男2 あ、うん、まあ、そんな感じで、

男4 一緒に居るんですか？

男3 あ、いや一緒に言うか、その、

男4 どんだけ仲良しなんですか…？

男2 アハハ、仲良しって言うか、

男3 ね、ホントにね、

男4 だから言ったのに…？

男3 すみません…、まあでも、それなりに、なんとかやっています…、ええ。

男4 黙ってうなづいて、そして、ため息を吐いてうつむく。

男3 …あ、じゃあそういう訳で、すみませんでした突然、行きましようか。

男2 うん…。

男4を心配そうに見ている男2。

男3 ほら行こう。

男2 …なんか、辛い事あったらなんでも言つてよ。大した力にはなれないかもしれないけど、話だけでも、楽になると思うから。

男4 …。

男3 そういう事言ったらダメだよ。

男2 だって、

男3 余計に傷つくんだから。

男4 (顔を上げる)。

男3 あ、すみません。ほら行こう、また早かったんだ。

男2 うん…。

二人、出て行くこうとする。

男4 (財布を出して)りようちゃんごめん、買い物行って来てくれる…うすき焼きがいいな

四人分。あと…、お酒も適当に。

女 オッケ！。

男2と男3、座る。

女 その晩は四人ですき焼きを食べました。それからこの二人は帰らなくなりました。夜遅く帰って来た母は、部屋の四隅で丸くなってる父達を見て激怒して、それ以来、全々家に寄り付かなくなりました。

男1 …このお母さんもさ、どういう人なの？家庭を顧みないにもほどがあると言っか、娘の事が心配にならないの？

女 母とは毎日連絡とってましたよ。私が学校行かない事とかしたい事、いつも応援してくれました。母は母で私は私、つかず離れず繋がってたんだと思います。

男5 …こんには…。

女 新しい父です。

男1 …あれも、この恋愛体質も…、そもそも好みが変わらない。

女 続けていいですか、最後まで聞いて貰わないとこの話、先生には

男1 …どうということ…。

男5、静かに椅子に座る。

男二人はうつむく。

男5 そういう訳で、ルリ子さんから、ここに住むように言われて…。何も聞いてませんか？

男4 …あ、はい、最近ほ、連絡すらとってなくて…、

男5 …そうですか…。あなたが、その…、

男4 あ、はい、最新の…、最新ていうか、直前の…、

男5 佐伯さん、でしたっけ？

男4 ああ、はい、そうです。

男5 はじめまして、ルリ子から聞いてます。あなたなんか、結構評判いいですよ。

男4 …あああそうですか、それは…。

男5 いやホントに。なんか、うん、割と頑張れそうな雰囲気あったって、ええ。

男4 …なんなんですかねそれは、ちよつとよくわからないですけど…。

男5 …いや、なんか、いきなり押しかけてしまつて、すみませんホント…。

男4 いえ、そろそろだと思つてたんで…。

男5 (女に) あ、初めまして。

女 (楽しそうに) はじめまして。

男5 君が、涼子ちゃん？

女 あ、はい。

男5 高校生？何年生だっけ？

女 一年。

男5 これから、よろしくお願ひします。

女 はい。

気まずい間。

男4 あ、じゃあ、私は…、

男4 おもむろに立ち上がろうとするのを男3が引き留める。  
そして男3と男2は立ち上がり、男4の背後に並ぶ。

男3 私達は、何も聞いておりません。

男2 そうだ。

男5 あ…、お二人が、例の…、

男3 私達は、この佐伯さんに世話になった者です。

男2 そうだ。

男1 もう「元父」とも言わなくなってる…。

男3 あなたね、そんないきなりやって来て、今日から父たと言われても私達は納得いきませんよ。

男2 そうだ。

男3 この家の主は佐伯さんです。佐伯さん以外認める訳にはいきません。

男2 ダメですよもう、私達はそう簡単には出て行かないですからね。もう出て行けない身体になつてますからね。

男3 佐伯さんはね、私達をこの家から追い出す為にお金をくれたんです。

男2 あなたは幾ら出さんだ。

男5 ああ、いや…、

男4 私、離婚したんです。

男3 何言ってるんですか、してないよまだ。

男4 いやしたんです。

男3 まだまだ大丈夫だから。

男4 何が？

男3 ん、わかんないけど、だつて離婚届書いたんですか？勝手に出されてないですか？

男4 そんな事したら犯罪ですよ。

男3 はんこ押ししました？

男4 だいたいね。だからまあ、時間の問題だと思つてました。

男2 どうして素直に押しちゃったんですか、もつとコネないと。

男3 そうだよ、あんた素直過ぎるよ。

男2 だいたいね、簡単に離婚しすぎなんだよあの女。

男3 そうですよ、正当な理由もなく離婚なんて出来ないんですからね。佐伯さんは何も悪い事してないんだからさ。

男2 そうだよ、何が不満だつて言うんだ。

男1 あんたらが家に居るからじゃないの？

男4 彼女が言い出したら聞かない事は、お二人も存じじやないですか。

男3 いやいや、でもこれは粘つた方がいいよ、

男2 うん、理由が見当たらないもの。

男1 あんたらが居るからじゃないの？

男3 佐伯さんはまだ仕事だつてちゃんとしてるのにな、ひどいよ。

男4 してないんですよ。

男3 …、してないの？

男4 してないんですよもう。

男3 してないんだ…。

男2 …え、いつから？

男4 実は私、とつくに首が回らないんですよ。

男2 ど、マッサージしますよ。

男4 仕事で失敗しちゃつて、自己破産しようと思つて。

男3 …そんなさあ、でもあれですよ、自己破産したつて離婚原因にはならないですよ確か、ねえ？

男2 あ、うん、わかんないけど、きつと大丈夫ですよ。

男4 もう、自信がなくなつちやつて

男3 何言ってるのさ、またやれるよ。あなた言つてくれたでしょ、まだまだ諦めちゃダメだつてだから私達…こまで頑張つて来れたんですよ。

男3 頑張つて一緒にやって来たでしょ、これからも頑張つて行くでしょ？

男2 そうだよ、負けないでよお父さん。

男1 お父さん…？！

男4 …いや、私はこの辺で、

男4、行くとする。

男3 じゃあ私らも行きますよ。

男2 ついて行きますよ。

男4 私と居たつてどうにもならないですよ。家も無いし仕事もない、お酒だつて買ってあげられないんですよ。

男3 そんな事言わないでさ、ここであなたを一人にする訳にはいかないもの。

男2 死なないでお父さん。

男4 娘をどうか、(男5に) よろしくお願いします。

男2・男3 お父さん。

男4 お父さんじゃない…何を言ってるんだ、ずつと…。お父さんじゃないよ…。年上のくせに。バカ…。私だつてね、こんなはずじゃなかったですよ、こんな…、

男5 あのお…、

男4 すみません、行きます…。

男5 いいんですよ、居ていただいて

三人 …？

男5 だって、ねえ、私が来たばかりに今までの生活が無くなるなんて、そんなの申し訳ないですから…。

三人 …。

男5 私は別に気にしませんから、どうぞ居てくださいいな。

男二人、椅子に座る。

男5 どうぞどうぞ居てください、今まで通り。

男4 なんかすみません…。

男2・男3 ありがとうございます。

男1 なんだこいつら…。

男5 ああ、でもお部屋はありますか？大きな家とは思いますが。

男4 いやいや部屋なんて、大丈夫ですよ。

男3 私らその辺の隅で丸くなってるだけですから、

男2 猫みたいでしょ。

男3 リビング広いですから。

男4 この隣に和室があつて、二階にようちゃんのお部屋と私の部屋があるんで、そこ使つて頂いて、

男3 もうあなたの部屋じゃないだろ。

男4 元々この人が使つてて、そのあとこの人で、

男3 私です。

男4 で、昨日まで私が使つてた部屋があるんです。

男2 歴代のお父さんのお部屋です。

男4 そこをあの（突然涙ぐむ）…！

男3と男2、ボクシングのセコンドの様に背中をさする。

男5 あ、でも私、その辺でいいですよ。

男4 何をおっしゃいます、

男5 あの、膝が、階段がちよつと、なので、好きな部屋使つていただいて。

男4 そういう訳には…、

男2 私その辺の角に居て、ヤス君があつちの角で寝ますから。

男5 じゃあ私、あつちの角で、

男4 じゃあ私も残りの角にしますよ。

男2 なんかいねえ、

男1 いや最悪でしょ。リビングの四隅におじさんが寝てるつて、それ奥さん帰りたくなくなるわ。

女 猫みたいでしょ。

男2 猫みたいで、ねえ。

男3 猫好きだねえあなた。

男2 飼いますか猫

男3 猫みたいな人がこんだけ居るのにまた猫飼ったら多頭飼育崩壊しちゃうから。

男1 気持ち悪いわ。

男2 ぐるぐる。

男3 え、それ猫？

男4 普通ニヤードでしょ。

男2 ノド鳴らしてると。

男3 普通ノド鳴らしてる音やらないでしょ。

男2 シャー。

男4 怒ってる。

男3 ま、こんな感じなんで。

男2・男3 ハハハ。

男5 賑やかでいいですな。

三人 ありがとうございます。

男5 私ねえ、ずっと一人だったんでね、楽しみですよ、これから。

男4 でも本当にいいんですか？なんか悪いなあ…。

男5 皆さんだって苦労してるんでしょ、わかります。

男3 まあ、苦労と言つていいのか、

男2 苦労なんて別に。

男1 うん、ほんとにしてないですもんね。

男2 でもまあそれはやっぱりそれなりにねえ、

男1 働けよ。

男5 彼女から聞いてますよいろいろ、夫は皆、結婚すると働かなくなるつて。

男3 いやはお恥ずかしい…。

男5 彼女も別に、あれでしょ、稼ぎがた〜さんある訳でもないでしょう。

男4 まあ、忙しくしてるみたいですけど、どうなんですかね、

男5 彼女から生活費を貰つてるとかじゃないんでしょう？

男4 ええ、一応夫婦別の財布になって、

男5 昔からそうですか？

男2 ああ、そうですね、はい。

男3 ええ。

男5 じゃあ大変じゃないですか、今までどうやって生活してたんですか？

男4 働いてる間は、その、私が面倒みたりしてましたけど、

男3 りょうちゃんは、毎月仕送り貰つてるんだよね確か。

女 あ、うん。

男5 じゃあ涼子ちゃんの心配は要らないんだね。

女 前よりはだいぶ減らされましたけど。

男4 ごめんなさい…！

女 いえいえ。

男5 この家は、彼女の持ち家なんですかね？

男2 どうなんでしよう、最初の旦那さんが建てたのかなあ…

男5 なるほど。まあ、家賃がかからないだけでもね、助かりますよね。

男3 いやそうなんですよホント…。

男5 まあそうですよね、甘えちゃいますよね。いや彼女もね、自分のせいなんじゃないかって、気にしましたからね。その、別に甘やかしてる訳じゃないのに夫がだんだんダメになっ  
ていくって言うのは、そういうなんて言うんですか、自分がそうさせているのかもしれない  
いつて。

男4 そうですか…。

男3 いやルリ子のせいではないですけどね。

男2 すみません、人の奥さん呼び捨てに、

男5 あ、いえいえ、お好きにどうぞ。

男2 おお、なんて器が大きい。(と男3を見る)。

男3 この人時々こうやって嫌味な言い方するんですよ、

男2 あ、そう聞こえたならそれはヤス君の器の問題だ。

男3 こいつめ。

男2 アハハ。

男5 賑やかだ。

男4 私も、こんな風にはならないように頑張ってきたんですが、なんでしようね…、

男3 え、ちよつと待つてよこんな風つてちよつと、

男2 いやいや、一緒一緒。

男4 呪いなんて物のせいにはしたくなかったんですが…、気が弱くなってるのかもしれないな  
…。

男1 呪い？

女 自分達がこうなったのは、呪い的な何かなんじゃないのかって、

男3 ここに来るとなぜか皆ダメな感じになっちゃうでしょ？それはやっぱり、なんかあると思  
っちゃいますよね。

女 最初のお父さんじゃないのかって、

男1 え？

女 わかんないけど。

男2 だってこんなフクロウの置き物置いてるんですよ、おかしくないですか？ずっとあるんで  
すよコレ。

男1 あるでしょフクロウくらい。

男3 やっぱフクロウと言えは世界的にも有名なほら、秘密結社あるでしょう？

男2 (男1に)内緒ですよこれ、

男3 だからなんかさういう、力みたいなのを持ってきて、僕等を働かせないようにするって言  
うね、秘密結社。

男1 あんたらを働かせないようにしてなんのメリットがあるんですかその秘密結社に。

女 あるいはこの家のせいなんじゃないかって、この家になんかさういう、良くない何かがある  
んじゃないかって。

男3 だってもうさ、ここまでずっと偶然では片づけられないんじゃないかなあ。

男2 お祓いでもしてもらおうかって話をね、してるんですよ。

男1 それは単純にあんたらへのせいだろうって気がしますけどね。

男3 でもりょうちゃんだつて学校行ってなかったんですよ。

男1 うん…、いや会話しないで。

男4 あなたは、そうならない事を祈りますよ。

男5 ええ、いや、彼女にも言ってやったんですがね、大丈夫ですよ。そういう心配は、無用で  
す。

ほか え？

男5 皆さんは何も怖がらなくていいですよ。ここに来たら働かなくなるとか、そういう呪いだ  
とか、そんな不安は全部吹き飛ばしてやりますよ。

男3 なんて頼もしいお方だ…。

男2 お父さんと呼んでいいですか。

男4 その自信はどこから来るんです？

男5 だって私、働いてませんから。

ほか …。

男4 働いてない？

男5 はい。私はね、ここに来る前から働いてませんから大丈夫。ご安心ください。

ほか …。

男2 なるほどね。

男3 なるほどねじゃないよ、どうなるんですか私達の生活は。働きなさいよあんた。

男5 いや前は働いてましたよ、ネジ工場で。

三人 おお…。

男5 とても楽で良い仕事だったんですけどね、派遣だったんで、契約が切れてからは何もして  
ないです。

男4 いつから働いてないんですか？

男5 半年くらい前かなあ。つい最近までは、失業保険でなんとかやれてたんですけど、それも  
なくなっちゃうんで、これからどうしようかなあって思ってたところでルリ子と結婚したん  
です。

男4 どういう流れでそんな展開に…、

男5 驚きですよ、あんな美人と、私がね。

男3 ルリ子は知ってるんですかあなたが働いてない事。

男5 もちろん彼女にも言いましたよ、そしたら彼女「あなたあの家にぴったりね」って。

男2 どういうこと？

男3 あなた本当に結婚してますか？

男5 しますよ、ひどいなあ、あははは。

男4 りょうちゃんは聞いてた？

女 今日新しいお父さんが行くからよろしくって。

男1 お母さんはもう付いても来ないんだ…。

男3 この先も働かないつもりですか？

男5 はい。

男3 なんぞ？

男5 身体壊しちゃって。

男4 ルリ子は、本当に好きなんですかあなたの事。

男5 そりゃあ好きだと思えますよ、じやないし結婚しないですからね。

男3 じやあ一緒に住んだらいいじやないですか、ここじやなくて。

男5 彼女は彼女で自由にやりたい人でしょ？そうじやないです？私が働けないし住む場所も無いなら、じやあここに住んだらいいって。

男3 待つて下さいよ、

男4 どうするつもりなんですかこれから。

男5 あのお、すみません。ちよつと横になつていいですか？久しぶりに電車乗ったんで、すみません（と横になる）。

男2 …こいつはアレだ、嫌がらせだ。

頭を抱える父達。

女 ここからお父さん四人体制です。

男1 …君も凄い。普通嫌にならないか、こんなおじさん達に囲まれて。

女 だつてこの人達「元々」お父さんですよ。

男1 君はあれだな、ゾンビの世界だとゾンビ倒せないな。

女 どういうこと？

男1 そういう情があると倒せないでしょ。

女 ゾンビの世界を例に出されても、

男1 似たようなもんだよ、なんか、お父さんのゴミ箱みたいになつてるじやないかこの家…。

男4 りょうちゃん、ちよつと話があるんだけど、いいかな？

女 うん。

男4 お母さんと、連絡取れないかな？

女 いいよ、なんて？

男4 こちら今、なかなか苦しい状況になつていて、一番の問題は、家庭内総生産。これが絶対に低いのね。つまりその、生活費を、送つて欲しいという相談なんだけど…。僕達にじやないよ、おたくの旦那に。

男3 最近、特に具合悪いみたいでさ、山田さん、その辺の事、知つてるのかなあと思つて。その、治療費とかも、今は我々が面倒見ている訳でさ。

女 わかつた、聞いてみる。

男4 申し訳ない。

女 そんなことするとあんたらお酒に使うからダメだつて。

男3 …ああ。でもそんなに最近はず、ねえ？

男2 うん…。

男4 でも、そうなるよ、じやあどうして僕らが知らないおじさんの面倒を見なくちゃならないんだという話になるじやないの？

女 じやあ出て行つたらいいんじゃないの？

男4 それはそうなんだけどさ…。

男3 僕等一致団結して、助け合つて生きて行こうって、決めたんです。ね？決めたもんね。なにでつちがどんどん送り込んで来るからさ、こつちもなんか意地になつて、ね？

女 送り込む？

男3 え、その、新たな旦那を…？

女 そつちが溜まつてつてるんでしようが。

男3 溜まつてつて言うか、まあ溜まつてるんだけど…。

男2 なんだかよくわからないんですよこつちも、何を意地になつてるんだか…。

男3 こつちの身にもなつて欲しいというか、ね？

男2 うん…。

女 「ちやいぢや文句言つてる暇があるなら働きなさいよ。

男3 働いてるんだよこれでも前よりは、

男2 ほそぼそただけど一生懸命やつてますよ。

男3 だけどみんな自分の事で一杯いっぱいなんです、

女 何度も言うけど嫌なら出て行けば？住む場所あるだけでもありがたいと思いなさいよクズどもが。

ほか…。

女 と母が言つてた。

男5 涼子ちゃん、少しいですか？

女 あ、はい。

男5 皆さん、何か言つてました？そりゃあ言いますよね…。早く出て行つて欲しいでしょうね。迷惑ですもんね…。そのうち、出て行きますから。

女 とお父さんが言つてた。

男3 ああ…。男5に いや、そんな事はないんですよ山田さん。

男5 ああ…。いや、こちらこそすみません。私が来たばかりにこんな、

男4 いやいや、悪いのは全部向こうなんですから。

男5 でもですわね、

男3 大丈夫ですから、ホント気にしないで、

男5 でも、皆さんあんなに楽しそうにしてたのに、最近はず私が話しかけると、どんよりしますから…。

男3 あ、いやそれは、それは気にしすぎだから、

男2 そうですよ、そんななんか、変な感じですか私達…？

男5 ええ…。

男2 え、

男3 変な感じなんだ…  
 男2 ヤダねえそれは、  
 男5 いや、私に変な感じなんですよ。  
 男2 いやいや、  
 男3 変な感じとか言わないでよ、  
 男5 出て行きます私。  
 男3 山田さん、そんな…、  
 男5 短い間でしたけど、ありがとうございます。  
 男3 もう、そんな、山田さん…、  
 男5 涼子ちゃんも、元気でね。  
 男3 山田さん！  
 男5 じゃあ。

男3だけが間に立って右往左往している。

男3 ちょっと、山田さん…、やま…、(男2に) え、止めないの？  
 男2 あ、ああ、山田さん、やめてよそんな、  
 男3 山田さん、  
 男5 いえ、行きます。  
 男3 山田さん！  
 男5 ありがとうございます。  
 男3 山田さん…山田さんも、全然行くことしないなあ…、  
 男5 ああ、膝が…、  
 男4 山田さん、お互い様ですからそんなの、気にしないでください。  
 男3 そうですよ、私らだっつい体調崩すかわからないんですから、そんな事言わないで。  
 男5 …なんかすみません、余計な気を遣わせてしまつて。せめて家の事はやりますから、  
 男3 いやいやそんな。

男5、カップを倒す。

男4 あーあ、  
 男3 いいですから、山田さん寝てください。  
 男5 いや、でも(カップを倒す)、  
 男4 あーあーあ、  
 男3 ほんと山田さんいいから、  
 男5 …すみません、  
 男2 …やっぱり、お被いしてもらった方が良くないっ山田さんちつともよくならないし、僕等  
 男5 だつてすぐバイトクビになるし、絶対なんかあるよ…。  
 男5 あ、私のはただの飲みすぎですから。

男2 お酒飲んでんの？それはダメだよ。  
 男5 すみません。  
 男3 お被いっただつてどこに頼めばいいのよ？  
 男4 結構かかると思いますよ。  
 男3 インチキな人も多いよきつと。  
 男5 すみませんホント(カップを倒す)、  
 男4 あーあ、  
 男3 寝てください。  
 女 私バイトしようか？  
 ほか え？  
 女 困つてるなら。  
 男3 な、何を言つてんだ…！  
 男2 何を言つてる！  
 男3 りようちゃんはその様な事気にしなくてもいいんだよ。  
 男4 そうそう、お父さん達はお父さん達で頑張るんで、  
 男3 これはただ言つてただだからね、  
 男2 そう言つてただなんだよ、  
 男4 気にしないでいいから。  
 男3 皆さんダメですよ、娘にこんな事言わせたら、  
 男2 うんダメダメ。  
 男3 びっくりした。  
 男2 びっくりしたねえ。  
 男3 うん。  
 男5 でもバイトやりたいなら、  
 男3 うん、バイトやりたいなら別に止めはしないけどね、  
 男2 まあやりたいならしょうがないんだけど、  
 男4 やるもやらないも自由だからね、  
 男3 でも本当にいいのかい？  
 女 うんいいよ。  
 男2 じゃあまあそうしてもらおう？  
 男3 うんまあ、涼子が言うならまあ、  
 男2 じゃあそうしてもらおうか、  
 男4 情けない話ですが、  
 男3 じゃあひとつ、よろしくお願いします。  
 女 わかった。

男達、満足気に微笑んでほつと溜息を付くが、  
 すぐにまた、

男達 いやいやいや…!

男3 何言ってるのダメだよダメ、

男2 あつぶねえ、

男4 うんそれはダメですよ。

男2 あつぶねえ、

男3 りようちゃんいいからホントにいいから、

男2 うん、ホントにあの、

男3 大丈夫だから、

男4 気にしないで、

男2 あー、あつぶねえ、

男3 なんですかもう、山田さん変な事言わないでくださいよ。

男2 あつぶねえ、

男3 びつくりしたねえもお。

男4 君は、自分のやりたい事をやりなさい。お父さん達の事は気にしないでいいから。

女 でも…、

男5 良かったねえ、良いお父さん達だったねえ。

男3 これはある意味挑戦ですよ。お前らやれんのかというね。だから耐えましょう、一年間、一年の辛抱ですから。

男5 二年？

男3 二年後、必ずやって来ますよ、救世主が。

男6、やって来る。

男達(男5以外) ばんざーいばんざーいばんざーい!

男3 とまあそういう話をね、していたんですよ。

男6 (笑って) あ、そうなんですか。

女、参ったなあと言った感じで頭に手を乗せる。

男2 どうぞどうぞお座りください、どうぞどうぞ

男6 ありがとうございます。

男3 いや、さつきね、外見たら居たからさ、こりやあもしかしたらと思ってる、

男2 ああ、そうなんだ。いやあ、お待ちしておりました。

男3 もお、あんなどこでモジモジしてなくてもいいのに。

男4 これからどうぞ、よろしくお願いします。

男6 あ、うん。

男2 いやあ、しかし耐えましたねえ。

男3 耐えたねえ、

男2 一時はどうなるかと思いましたがね、

男3 そうだねえ、

男2 あれ、なんかあれ、強そう。

男3 あ、ほんとだ、スポーツやりましたよね?

男6 ああ、うん、マンガ、マンガクラブ。

男3 やってないか。

男2 え、スポーツやってないのにそれ?! いやあ、これは頼もしい方が来られましたよ。

男3 ですね。

男4 お仕事は、何をされてるんですか?

男6 あ、うんと、ネジを、

男3 え、現役の?!

男2 ついに現れました!(拍手)

男3 いつかは来るんじゃないかと思ってましたよ。

男2 山田さん、ほら、後輩じゃないですか? 山田さん?

男5 …。

男4 …まあ、そつとしておいてあげましょう。山田さんは、初めての経験ですから。

男5 あ、すみません、いざ新しい人が来ると、寂しいものですね…。

男2 まあ、でも、なんにも変わらないですから、

男3 今よりずっと、暮らしが良くなりますから。

男5 そうですね…。

男2 元氣出して。

男3 そうだ、お部屋案内しますよ。

男6 お部屋?

男3 二階にね、お父さんのお部屋があるんですよ。

男2 どうぞ、さあどうぞ、遠慮なさらず。

男3 しばらく誰も使ってないですから綺麗ですよ。汚いか。

男2 掃除しないと。

男3 あ、ちよつと待っててください。今ね、掃除をね、

男2 待ってくださいね。

男6 あ、うん!(周りを見回して)へえー。

男4 すみません、悪い人達じゃないんです。純粋に嬉しいんですよ、あなたが来てくれて。

男6 (ニッコリして) ああ、

男5 飲みますか?

男5 なれそめを聞かせてください…。

男2 きれいでした!

男3 全然きれい。

男2 なんも無いけどいいですよね?

男3 お、やりますなあ。

男2 今夜は祝杯ですな。

女 (皆に) あのお…  
男4 あ、りょうちゃんです。

男3 娘ですよ。

男2 かわいいでしょ。涼子って言うんです。

女 あのお、

男6 え、誰の？

男4 あなたの娘に決まってるじゃないですか。

女 あのお、お父さん。

男6以外 はい。

男3 あ、すみません、どうぞ、

男2 どうぞ、

男4 呼ばれてますよ。

女 いや、あのお、

男6 僕に娘？！やっ！

ほか (男5以外)、拍手。

女 さすがにこの時はかりは焦りましたね。だって知らない人が来たから。

男1 え？

女 この人のこと、母から何も聞いてなくて、帰ったら居たんです。

男1 じゃあ誰？！

男2 お父さん、まあまあおひとつどうぞ、

男6 え、ナニコレナニ？

男2 まあまあ、

男6 ナニ？え、何？

男3 お父さん飲みそうだなあ。

男6 (二気に飲んで) まっず！うえ、ナニコレまっず！

男2 まっずいことないでしょう(笑)

男5 …私、ちよつと横になつていいですか？

男3 あ、うん、無理しないで、

女 あのお、皆さんすみません…、

男4 (男5がこぼすので) あーあー、

男6 大丈夫？

男3 山田さん、やっ！

女 あのお？

男5、からつく。

男3 山田さん？！

男5 皆さんは、よく耐えられましたね…、私は、無理かもしれない、  
男3 何が？

男5 昨日まで私はお父さんだったのに、今日からの私は、なんなんですか？

男3 なんなんですか？…、なんなんだろうね…、

男5 なんでまだ居るんですか？どういつもりで居たら、ここに、私は…、

男3 どういつもりって…、

男2 そこ考えちゃダメなんですよ。

男3 そう、そこ考えないのが秘訣なんです。

男5 やっぱ嫌だなあ、やっぱ嫌だよ、

男3 嫌だつて言つたつて、しょうがないでしょうそんなの…、

男5 あの人追い出してください、私嫌です、嫌ですもん…、

男2 あなた働いてなくせにわがまま言うんじゃないよ。この時を待ってんだからさ、

男5 嫌なものは嫌ですよ、私上で寝ます。

男3 ちよつともお、

男2 膝痛いんですよ？

男5 私の部屋なんですよ、私使つてないんですから、

男3 あなたの部屋じゃないよもう、

男4 離婚したんですよ？

男5 してないです。

男3 してないことないでしょうが。

男2 いい加減にしないでよ山田さん。

男5 してないですよ、

男4 離婚届に判押したんですよ？

男5 押しましたけど…、

男3 じゃあしてるんだよ。

男5 もうだいたい前の話ですから覚えてないです。

男4 私もそうでしたよ。

男2 覚えてなくてもハンコは残つてると思っよ？

男5 婚姻届と一緒に書いたんです。覚えてないです。

男4 それは、早いな。

男3 早すぎだね…、

男5 まるで…結婚したと同時に離婚したようなものじゃないですか…、もしかしたら、最初から何も始まつてなかったのかもしれない…、私は、ここに居ないのかもしれない…、

男5、去ろうとする。

男3 山田さん、山田さん、だつてどうするの、今更、そんな、ど行くの？

男5 私はここには居てはいけない人間なんです。

男3 今ここに居るのは居てはいけない人間はっからだからさ、

男2 ここに居ていいのはりょうちゃんとあの人だけ。  
男5 離してください…。  
男2 お父さん、なんか言っちゃってよ。

男6、ゆつくりと立ち上がり、昔の歌を歌い出す。

ほか ……

そのままコップに酒を注いで、ゆつくり微笑んでうなづいた。  
やがて男5は、黙って座って、ちびちびと飲み始めた。

男3 お父さんだ…。

男2 お父さんだね。

男3 うん、お父さんだ、一番。

男4は男5の肩を叩く。

微笑む男5。

女 これが高校三年、私があの家で過ごした最後の夏でした。

男1 この人、どうなったの？

女 もうしょうがないのでそのままにしておきました。説明するのもめんどうだし、お父さん達も楽しそうだったし。なにより仕事してるのこの人だけだったから。

男2 ねえねえお父さん、お父さんてき、まだお仕事順調？またしてるの？

男6 してるよ。

男2 へえー、凄いね。

男6 なんだよ。

男2 凄いよヤス君、お父さんまだ働いてるんだって。

男3 え、じゃあさじゃあさ、貯金持ってる？

男4 コラ、お父さんを困らせるんじゃないよ。

男6 なんだ、お小遣いか？

男3 いや、そういうんじゃないけどさ、

男4 山田さんを散歩に連れて行く時間だぞ。

男3 わかってる。

男2 ああ、りょうちゃんがさ、どうすんのかなって思ってたさ、

男6 涼子が、どうかしたのか？

男2 だってさ、もう高校三年生じゃない、そしたらさ、来年どうすんのかなって思ってたさ、もしかしら、大学行きたいのかもしれないし、ね？

男3 うん、まだ本人に聞いた訳じゃないからわかんないんだけどさ、

男2 でも僕等がそんなこと聞いても、気を遣って本当のこと言わないんじゃないかと思ってさ、

男4 それでもし大学行きたいなんて言ったらどうするんだよ、お金あるの？

男2 だからさ、お父さん幾らあるのかなあって思ってた。

男4 幾ら掛かると思ってるんだ。どうする、東京行きたいなんて言い出したら。

男3 そうだよ…。

男2 じゃあせめて地元の、どうでもいい大学に通って貰おうか？

男3 でも好きな事してもらいたいじゃない？

男2 好きな事はしてもらいたいよ。

男3 「好きな事していいよ」って言って、「出来れば地元のどうでもいい大学に行っちゃいたいんだけど」ってそれ頭おかしすぎやろ。

男2 もうどうせ頭おかしいって思われてるんだからさ、

男3 じゃあ聞けるか。

男2 聞けると思うよ。

男3 でもどうでもいい大学には行かせたくないなあ。

男2 そうだよ。

男4 どうでもいい大学ってなんだよ失礼な。

男2 いやだってさ、あるじゃない、卒業したはいいけどこの四年間一体なんだつたんだろ？なつていう、

男4 それは大学のせいじゃなくて本人のやる気次第だよ。

男2 そっか、まあそっか、

男3 じゃありょうちゃんがどうでもいい大学に行くって言ったらいんだ！

男4 そうだけど、どうでもいい大学に行くって言う娘もどうなんだよ。

男3 そうだよ、それはそうなんだよ。

男2 りょうちゃん気を遣って言いそうなんだよ、どうでもいい大学に行くって

男3 どうでもいい大学はダメだよって顔して聞いてみたらいいんじゃない？

男2 それってどんな顔？ちよつとやってみてよ、練習。

男3 え、あ、ねえ、りょうちゃんさ、大学行くならどうも行きたい？

男2 あ、ダメだ。

男3 何が？

男2 もう顔がどうでもいい大学の顔してるもん。

男3 どうでもいい大学の顔って何？

男2 自分ではわかんないだろうけど、もうなつちやってるよ、どうでもいい大学に。

男3 どうでもよくない大学の顔してるよ、今。

男2 うん、でももうどうでもいいんだもん、ヤス君の顔自体。

男3 なによ、俺の顔の話になつちやってるじゃん…。

男2 なんだよもう…。

男4 いいか、どんな大学だって金はあるんだからな。

男3 そうだよ、え、やっぱりお金要るよね…。

男2 お父さん、そんなに持ってないか…。

男4 当たり前だろ。

男3 持っていない顔してるもんな。

男6はニコニコしている。

男2 でもさでもさ、お父さんネジ工場で働いてるんだぜ？

男3 ネジ見てるだけなんだからそんなに貰えないよ。

男4 お父さんネジ見てる仕事なんて一言も言っていないよ。

男2 そうだっけ？

男4 そうだよ。

男3 (男6に) じゃあ何してるの？

男6 お父さんはな、ネジを見てる人の隣で、

男3 うん。

男6 ネジを拾ってんだ。

男3 ……そうか、ネジを拾う仕事か。

男2 そんな仕事ある？

男3 俺達はネジを見てる人の隣でネジを拾う人に養って貰ってるのか、なんだか申し訳なく思

えて来たなあ。

男4 感謝しないと。

男2 え、じゃあどうしよう？どうしよう？

男4 ここで話し合ってもしょうがないだろ。本人が東京行きたいのかもわからないし、働

たいかもしれないし。

男2 そうだな、自分で考えてるかもしれないもんな。

男4 よっぽどしっかりしてるんだから、俺達が心配するような事じゃないよ。

男3 そうじゃなくてさ、こつちが心配してるんじゃないかと思つてさ、そのせいでやりたい

こと我慢してるんだつたら可哀相じゃないか…。

男2 りょうちゃんにはやりたいことやってもらいたいんだけどなあ…。

男4 今更俺達に何が出来るって言うんだ…。

男3 うーん、

男2 なんにも出来ないから困ってるんだもんね…。

男4 俺だつて無理だよもう、単純な肉体労働とか、やっつけられないよ…。

男3 若い子に怒られたりするもんね、

男2 嫌だよね…。

男5 とまあそういう話をね、お父さん達でしていた時があつてね、

女 うん…。

男5 もう、ほら、一学期も終わる頃でしょ、大学受験するなら、勉強しないといけないし、ど

うしたいのかなと思つてさ。

女 大学はいいよ。

男5 そう…。

女 学校好きじゃないし。

男5 じゃあ、高校卒業したら、どうするの？

女 え、別に、うーん…。

男2 ちよつと山田さん、そうやってお父さん面するのやめてよね。

男5 私だつて気になりますもの、そりゃあ。

男3 いいんだよ、僕等が気にしなくても、りょうちゃんはりょうちゃん考えてるんだから、

ね、りょうちゃん。

女 何を？

男3 何を？だから、将来のこと。

女…。

男2 りょうちゃんさ、やりたいこととか、無いの？

女 やりたいこと？

男2 うんなんか、将来こうなりたいたいとか、こういうことやってみたいとか、

女 (きつぱりと) 無い。

男2 無いのか…。

男3 こうはつきり言われちゃうとな

女 何かにならないとダメなの？

皆 言葉に詰まる。

男2 ……さすが僕等の娘だね。

男3 娘じゃないけど、娘だね。

男5 やりたい事が見つからないなら、見つかるまでは、大学行った方が良いんじゃないのか

な？

男2 なんだい偉そうに…。

男3 そういう山田さんは、大学出てるのかい？

男5 そりゃあまあ、出ますよ。

男3 ……そう。

男5 そりゃあ出ますよ、

男2 え、ヤス君出てないの？

男3 え、出てるよ、なに言ってるのさ。

男2 え、ホント？

男3 ほんとだよ。なんだよ。

男2 だよ、佐伯さんだつて出てるもんね。

男4 当たり前だろ。

男3 決まってるじゃないか、この中で大学出てないのお父さんだけだもんね、そうだよ

お父さん。

男6 お父さんが大学出てるか出てないか、それが分かるのは、大学出てる奴だけだよ。

男3 ……うん。

男2 え、だから…？

男3 (男2に) だから、「大学出てない」ってことだよね？  
 男2 え、それは、ヤス君が大学出てたらわかるはずなんだから  
 男3 え、だから、「大学出てない」でいいんじゃないの？  
 男2 ああ、まあ、ヤス君が大学出てたら、それでいいと思うよ…。  
 男3 え、なにその言い方…。  
 男2 いや、だからいいと思うよ。  
 男3 え、待って、藤井さんはどう思ったの？  
 男2 え、だから、  
 男3 大学出てたらわかるんだろ？  
 男4 大学出てたら、大学出てるか出てないかがわかるんだから、俺達大学出てる人達にはわかるんだよ。  
 男3 うんだからどう思ったの？  
 男2 どう思ったのかどうかは大学出てればわかるんだから、聞かなくてもいいんじゃないかな？  
 男3 いやだから、皆はどう思ったのかわかって、  
 男4 お父さんがあんな言い方するって事はどういう事か、  
 男2 大学出てるかどうかは大学出てる奴にしかわからないんだからさ、  
 男3 だからどっちなんだよ？  
 男2 ヤス君は大学出てないからさうやって不安になるんだよ。僕等大学出てる組は一切不安にならないもん。  
 男3 早くどつちなのか言つてよ。  
 男2 だからヤス君は出てないって思ったんでしょ？それは出てないから分からないんだよ。  
 男3 え、てことは出てるってこと？  
 男2 そりゃあそつだよ。  
 男3 出てるの？  
 男2 そりゃあ出てるよ。出てるから分かるんだもん。だよね？  
 男4 まあ、あんな言い方するつて事は、  
 男5 出てますね。  
 男4 まあね。  
 男3 だよね。  
 男2 だよねって何？  
 男3 出てるよね。  
 男2 そんなシレッと出てる側に来てダメだよ、出てる側はもうヤス君が出てない事知つちやつてるから受け入れられないよ。  
 男3 いや出てるよ、出てると思つてるよ。思つてたんだよ最初から。  
 男6 出てないよ。  
 男3 出てないじゃないかよお！  
 男2 出てないんだ…。  
 男4 なんであんな言い方したんだ…。

男3 なんだよもう、結局ここに居る全員出てないんじゃないか。  
 男6 (女に) 大学行きなよ。行きなよ、大学。  
 男5 お父さんそう言ってるし、行つていたほうがいいんじゃないのかな。  
 女 うーん…、でもこの人お父さんじゃないし、  
 男3 お父さんじゃない訳ないじゃない。  
 女 だつて知らない人なんだもん。お母さんに聞いても「わかんない」つて。  
 男2 …聞いた？お父さんじゃないんだつてさ。  
 男3 聞いてたよ。  
 男2 どうする？  
 男4 (男6に) あなた誰なんですか？  
 男3 まあまあ、そこは今いいじゃない。  
 男2 良くないよ、なんで知らない人と生活しなくちゃいけないんだよ。  
 男3 だつてもうしちやつてるんだからさ生活は、生活費のほとんど出して貰ってるんだからさ、  
 男2 でもやつぱりここは出て行つてもらわないと、  
 男4 お父さんじゃないんだもんね。  
 男2 うん…。  
 男3 そんなこと言い出したらみんなお父さんじゃないじゃない。  
 男4 ああ…。  
 男2 そもそもこの人連れて来たのヤス君でしょ？なんで連れて来たんだよ。  
 男3 いやまあ、それはいいじゃない。  
 男2 よくないつて、何言つてんの。  
 男3 え、だつてさ、あんな風に玄関の前でモジモジしてたらさ、誰だつて新しいお父さんだつて思つじゃない。  
 男2 思わないよ、もうどうかしちやつてるよそれ。  
 男3 うん、でもどうかしちやつてる事に気がつかないのが俺達の良いところじゃない。  
 男2 何言つてんのさつきから。  
 男5 あのお…？  
 男3 あ、どうぞ。  
 男5 じゃあ私は、まだ離婚してないつてことですか？  
 男4 ああ、そうですね、山田さん、まだお父さんかもしれないですね。  
 女 あ、そつだと思つ。  
 男5 ……ほらあ、だから言つたじゃないですかあ！もお、  
 男3 いや、山田さん  
 男5 あんなに言つたのにい！もお！  
 男3 いやお父さん、お父さんちよつと待つて  
 男5 うるさいよ！何を今更「お父さん」だ！  
 男3 だつてさ、二年経つたんだからさ、交代だつて思つもの普通  
 男2 それは確かにそつだね、お父さん最長記録だ、  
 男4 この人のどこがそんなにいいのやら…。

男3 なんかがごめんね、今までないがしろにして。  
 男5 ひどいよ、誰も信じてくれないんだもん。私もう上で寝ますからね、お父さんの部屋で。  
 男2 そりやお父さんだから好きに使ってくださいよ。それよりこの人どうすんの？  
 男3 いやだからさ、この人居なくなると厳しくなると思っただよね生活が。  
 男4 でも知らないんだよ？  
 男2 いや恐くない？どういうつもり？  
 男3 いや怖いよね、知らない人の家で呑気に寝泊まりしてるんだもんね。  
 男6 え、「居て良い」って、居て良いって言うから。  
 男3 幾ら「居て良い」って言われても、そこは断るでしょう普通。  
 男6 何人も、色んなおじさんが出入りしてるから、いいのかと思っ、僕も。  
 男3 色んなおじさんが出入りしてるから他のおじさんも出入りしていい家なんて無いからね。  
 男2 寄所じゃないんだからさ。  
 男3 りょうちゃんもなんで今頃言うの？  
 女 あ、ごめん、この先どうなるのかなと思っつて。  
 男2 危機感無すぎだよそれ。  
 男3 そうだよねえ。  
 男4 じゃあいつたん説明して出てって貰おうか。  
 男3 いや、とりあえずさ、この人はまだ自分がお父さんだと思ってる訳だからさ、そのままお父さんでここに生活費出して貰おうよ。  
 男2 それはひどくない？  
 男4 うん、ちよつとそれはどうかな。  
 男6 涼子。  
 男3 あ、コレちよつとダメだな、  
 男2 あ、

男6を引き離す二人。

男3 気にしてよもつと…、  
 女 好きにしてるんだけどなあ。  
 男2 おかしいでしょ、どう考えてもこの環境。  
 男3 俺達が言う事じゃない事は重々承知で言ってますよ。  
 女 でも…、お父さんみないだから。  
 男2 それなんだよなあ！  
 女 え？  
 男3 そう、それがね、僕等を苦しめてるんですよ。  
 男2 りょうちゃん分かってないなあ…。  
 女 え、何が？  
 男3 この家のせいでも、お母さんでもお父さんの呪いでもなく、君なんだって言うね…、  
 女 どういうこと？  
 男3 もお、お願いしますよ…。  
 女 待つて待つて、私…？  
 男2 大学行つてください、お願いします！  
 男3 お願いします！  
 男4 なんだよそれ、追いつきたいじゃないか…。  
 男3 もちろん寂しくなるけどさ、ここは鬼にならないと、  
 男4 何を今更、親みたい顔して…。  
 男3 これは皆の為でもあるんですよ。我々だって前に進めましょよまっつと。  
 女 でも、大学行くお金なんて無いし…。  
 男5 お母さん、出してくれないのかい？  
 女 出してくれるとは思っけど、そんな話した事もないから、  
 男4 じゃあわかつたよ。これ、使つてよ。

男4、現金の入った封筒を出した。

男3 これ以上近づかないでね、  
 男2 勝手に話し掛けちゃダメだから。  
 男6 君は、ここに居たらダメだよ！君はこんなところに居ちゃダメだ！  
 男3 なんだあんた急に、  
 男6 家を出なさい、広い世界を見て来なさい！  
 男3 待つて、そんなことはあんたに言われなくても皆思ってる事なんですよ、  
 男2 りょうちゃんがこのままじゃいけない事くらいわかつてますよ、  
 男3 あんたが真っ先に言わないでよ。  
 女 私は別にこのままでもいいんだけど。このままじゃダメなの？  
 男2 ダメだよ。  
 男3 もしお父さん達の事気にしてるなら構う事ない、好きなように生きなさい。  
 女 そこまで気にした事はないんだけど…、

女 なにこれ？  
 男4 バイトしてたんだ、実は。  
 男3 お、おい、なんだよそれ！  
 男4 高校卒業したらこの家出て行くんじゃないかと思っつてさ、そしたら必要にならなかつたと思っつて。  
 男2 待つてよ…、なんだよ自分ばかりカッコつけて！冗談じゃないよ！  
 と言つて男3も封筒を出した。  
 男2 俺だつてバイトしてたよ、必要になると思っつてね…。  
 男3 …ちよ、ちよつと待つてよ…、え…、なんだよもお…、調子狂つちやうなあ…。

と言って、封筒を重ねた。

男2 なんだよ、みんなして…。

男4 うつむいて立ち上がる。

男3 ああ、山田さんは、気にしないでいいんですよ、

男2 うん、働けないの分かってるから。

男4 すみません…、これっぽっちで。

と言って封筒を重ねた。

男2 え…、

男3 いつの間に…、

女 封筒の束を持ち、

女 ありがとう、お父さん達。

男6 うんうん、うん。

皆、男6を見た。

男3 出さないのか…。

女 それで私、家を出たんです。

男1 なるほどね、だからお父さん達の願いは叶えてあげたいと、

女 せっかく一人暮らしにも慣れて、彼氏も出来て、あ、不倫だけど、

男1 いや…、

女 ようやくこれからどうしたいのか、私はどうなりたいたいのか、考えてた時なんです。そこへ父からのライン。ここちに来て四年、てことはもう一人増えるかどうなってるか…、ね、めんどくさいでしょ。だから先生はいいですよ、私ひとりで行って来ますから。

男1 でも…、

女 余計にめんどくさい話になりますから。

男1 試験に間に合うように帰って来てよ。

電話が鳴る。

女 あ、タクシーかな。

男1 という話をして、それで、行きましたよね？

女 はい。

男1 で、帰って来た。

女 はい、ちゃんと試験に間に合ったでしょ。

男1 うん、それは良かった。良かったけど…、これがお父さん達？

女 はい。

男1 なんて連れて来ちゃうの？

男2 あのお、燃えちゃって…、

女 帰ったら家が無くなってたんです。あれは、燃えたと？

男3 うん、あのお、燃えたと。

男2 焼けたばかり。

女 だそです。

男1 うん…。

女 皆ありがとう、回想シーン付き合ってくれて。

ほか ああ、うん。

男1 それで…？

男4 あのお、それでちよつとどうしたらいいかわからなくなっちゃって、すみません、涼子に頼っちゃいました、

男2 すみません、呼び捨てで。

男3 山田さんも、ね、きつちり離婚してね、

男5 あ、そうなんです。

男3 だから、もう誰も、連絡取り辛くなって、ルリ子に。

男4 誰もあの家の事わからなくて、どういう手続きとつたらいいの、

男2 なんか、煙草の火の不始末じゃないかって、まあそういう風には言われたんですけど、消防に、

男3 でも誰も煙草吸わないんですよ。

男1 え？

男2 だからまあ、なんなんだろうなって、ね？

男3 やつぱり、だからやつぱりこの置き物が良くないんじゃないのかなあって言う、ね、そういう話にはなってる、ね？

男2 まあとありえず、どうぞ。

男1 いや、要らないですよ…。

女 (笑って) こうやってすぐ何かのせいにするんですこの人達、自分たちがあの家から出て行けないことも私のせいにして、それなのに私が居なくなっても出て行かずになんにも変わらなかつたんです。ひどくないですか？

男1 (男6) この人もまた居るんだ…。

女 居ましたね。

男6 よろしくお願ひします。

男1 うん、何が？

女 よろしくお願ひします。

男1 いや、連れて来られても困るんだけど…。

女 家が無いんです。

男1 そうかもしれないけど、

ほか よろしくお願いします。

男1 ちょっとおめて下さい、なんですかそれ。

女 それでね先生、お母さんには報告しなくちやなあと思っつて、そしたらもう激怒しててお母さん、そりゃあ当然ですよ、人の家に何してくれてるんだつて話で、だから「次の人楽しみにしとけ」つて。

男3 いやね、私達も待つてたんですよ、りようちゃんが出て行つて二年経つて、でも誰も来なかつたんです。なんだろうなあつて思つて、ね。

男2 だからもう、山田さんで終わりなのかなあなんて話してたら、ね、正式に離婚させられて、ね？

男5 はい…。

男4 どこぞの誰かと結婚はしてるだろうけど、この家に送り込むのは止めたんだなあつて話してて、

男3 それでね先生、ここまで観て来られて、まあ薄々お分かりだとは思いますが、先生は結婚してるとはすよね？奥さん、どんな方なんですか？

男4 どういう人かと聞かれたら、

男3 まあ、(女を見て)「こついう人」としか言いようがないですよ、ねえ。

男4 娘ですからね。

男2 涼子、大きくなつて、ますます似て来たなあなんて、思つてましてね。

男3 ルリ子つて言うんですよ、奥さん？

男1、女を見る。

女、照れくさそうに微笑む。

男3 先生も、(片付け途中の部屋を見て)「この様子だと、

ほか (同様になつて)

男3 まあ大変だとは思いますが、ひとつ、よろしくお願いしますね。

ほか お願いします。

男6 がんばってください。

男1 …。

女 結婚して、そろそろ二年なんですよ、ね？もうほとんど会つても居ないんですよ、ね？

男1 …。

女 次の人、楽しみにしとけつて言つてました。私は独り暮らししてるんで会えないんですけど、どんな人が来るんですかね。じゃあお父さん達をどうかよろしくお願いします、お父さん。

男1、天を仰ぐ。

〜終〜